

「塩の道」は「ムコ」の道

藩政時代、青森県から岩手県北部にかけての太平洋沿岸地域は、献上品にも用いられる優秀な「南部駒」を輩出する馬産地として知られていました。南部駒の生産において、中心的な役割を果たしたのが「南部九牧」と呼ばれる9カ所の官営牧野。市内では、侍浜に「北野牧」、宇部に「三崎牧」が置かれていました。

※南部藩は1664年以降、盛岡藩と八戸藩に分かれ、市内では宇部・山根・侍浜の一部が盛岡藩領でした

そして、馬と並んで重要な特産品とされたのが「南部牛」です。盛岡藩内では1万5千〜2万頭あまりの牛が飼育されており、その約8割を九戸郡と下閉伊郡が占めていたとされます。ヤマセの影響で十分な農作物を得ることが出来なかつた沿岸地域において、畜産は古くから重要な産業でした。

昭和初期に刊行された九戸郡誌には、南部牛について「骸質強健、肢蹄堅牢、能く粗食に堪ゆる特性を有し、肉役兼用に適せる畜牛として広く他府県に輸出される」という記載があり、使役牛として広く知られていたことがうかがえます。藩としても牛の販売を重要視し、一時期は他藩への無許可での移出を禁止する「他領移出御法度」の定目に

加えられましたが、これは農民からの反対も激しく早期に解消したようです。記録によると、毎年3千頭あまりの子牛が藩外に移出され、東北のみならず、遠くは新潟・長野・千葉などまで販売されました。また、新潟などに鉄を移送した際に、運送した牛も売り払い身軽になって帰路についた、という逸話も残されています。

農家にとって、田畑に使う「厩肥」を得るために家畜の存在は欠かせませんでした。加えて輸送手段、子牛販売により現金収入を得る手段としても、牛は農家の経済において大きな位置を占めていました。しかし、自分で牛を買える農家ばかりではありません。零細農民に対しては、牛を貸付けて飼育・繁殖させ、子牛の販売収益を得る「立分飼育」と呼ばれる小作制度が行われていました。これらにより、下閉伊郡では、多くの家で2〜4頭程度の牛を飼っていたと記録されています。

謎多き「南部牛」
南部藩領で飼育されていた在来種を総称し南部牛と呼びます。明治以降、外国種との交配が進んだため、現在は純粋な南部牛は存在しません。そのため、その正確な姿は不明ですが、前駆



平庭高原キャンプ場近くにある奥清水のベゴ泊り場跡。かつて牛方たちが野宿をした場所で、牛が水を飲む「木船」も再現されています

「牛の習性」を巧みに利用

牛方は1人で6頭から7頭の牛の群れを率いました。この群れのことを「ハズナ」と呼びます。7頭もの牛を1人で統制するのは容易なことではありません。牛方は、牛の習性を巧みに利用することで、これを実現しました。

そのひとつが、強い牛に従って群れを形成する習性です。群れの中で順位が明確な場合、牛たちは順位の高い牛に従います。逆に、順位が低い牛は、春に牛同士を戦わせる「角突き」を行い、群れの中での順位を明確にして、統制しやすいハズナを作り上げました。この「角突き」が、現在の闘牛のルーツにもなっています。ハズナのリーダーは「ワガサ(若様)」

輸送の道中には牛方宿があり、そこに宿泊するほか、時には野宿することもあったようです。野宿する際には、オオカミやクマの襲撃に備えて、牛の角を外を向くように円形に並べたという話も残っています。他にも、輸送中に急病にかかって行き倒れた記録や、牛が川に入り塩を流してしまつたという逸話も残されています。各地を渡り歩く牛方は、憧れの目で見られる職業でもあったようですが、決して気楽な稼業とはいえなかつたようです。

が多数存在しています。

ヤマセの影響により、農業だけでなく生計を建てるのが難しかった沿岸部の農家では、春や秋の農閑期になると、自家用の牛2〜4頭に塩を積み「駄替え」という交易に出ました。駄替えでは、それぞれ得意先の集落を訪れ、米や穀物と交換したようです。

塩と米の交換比率は、盛岡城下では一般的には塩1升対粳1升(玄米に換算すると塩4升対玄米3升)とされます。一方で、塩は内陸に行くほど貴重になるため、藩内でも鹿角や沢内まで運べば塩1升が米3升になったとも言われています。しかし、牛たちを統制して遠征するのは、誰にでもできるこ

牛と共に歩む

緩慢な例えとして使われる「牛の歩み」。しかしその歩みには、険しい山をものもしない力強さが秘められています。数百年の長きにわたり、人々の生活の基盤であった「塩の道」による交易。それを支えたものこそ、ゆっくりと、しかし着実な「牛の歩み」でした。この地に息づく牛と共に歩んできた歴史。そしてこれからも牛と共に歩もうとする人たち。そんな「牛」にまつわる物語を紹介します。

塩の道旧道入口



が発達し、脚が短く関節が丈夫、日本在来牛としては大きめの体格であったと推測されます。また、牛や馬を管理した牛馬帳には、黒・白・赤・柄などの毛色と、絞・簾・鼻白などの特徴が記載されており、さまざまな色の柄の牛がいたことがうかがえます。

「塩の道」による交易

岩手県沿岸部では、各村々に塩釜が作られ、「製塩」が行われていました。沿岸部で作られた塩は、内陸部に運ばれ穀物などと交換されました。この塩を運んだ交易路は、現在「塩の道」と呼ばれています。県内には沿岸各地と盛岡、そして山間部を結ぶ「塩の道」

牛方道中あれこれ



三陸鉄道の陸中野田駅前に建てられている牛方の像

■牛は「追う」もの
「牛を率いて〜」という、馬のように手綱を引く様子をイメージする人も多いかもしれませんが、実際は「南部牛追唄」と民謡の名称にもあるように、牛方は「バアバア」と声を上げて牛

を追いたてたといいます。牛には識別と獣よけのために鈴や鐘が付けられていました。牛方が行きかう塩の道の往来は、さぞにぎやかだったことでしょう。

■子どもの玩具も「牛」

右の写真は葛巻町で収集された「ベゴ」「わらべ牛」などと呼ばれる玩具。アカマツ製で、枝部分を角に見立てています。鼻輪と綱も付けられており、中には車輪がついた「ベゴ」もあることから、子どもが引いて歩いて遊んだものかもしれません。かつては、子どもたちにとっても、牛が身近な存在だったことを物語ります。

